

合龕がんの中に安置され、台座は二段で地藏尊だけが瓦焼である。

以前は人の墓であったのが、いつの頃からか信仰の対象となり、村の人々は首から上の病を治す地藏様として

佐伯時代の独歩の手紙 (中)

明治二十七年の一月十五日に中桐確太郎に宛てゝ手紙を出してある。その内容は冬季休業中、帰省して見聞したこと及び熊本旅行のことを報らせてある。

先ず、新年来り旧年去り目出度存じ候と新年の挨拶をして、一昨夜帰って君からの十二月二十七日付の手紙を受取ったと礼を述べて旧年二十五日佐伯を出発して帰省し、正月三日に国元を出て熊本に行き、久しぶりに高木正雄君と遇って快談し、また水谷君を訪うなど都合五日間熊本に滞在して十日帰路につき、九州の中央を横断し

信仰し、地藏様の廻りには穴のあいた耳の病気を平癒祈願する小石が納められている。

久土地区は須平地区の隣りであり、恐らく須平の瓦師の作られたものだと思われる。

(つづく)

山内武麒麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

て三十六里の路を、二十九里徒歩で帰り、途中阿蘇山に登り、噴火口の荒寥として而も偉大で崇高な光景には強い感懐を抱いた。と熊本旅行のことを報告してある。

この旅行日数は二十日(十二月二十五日から正月十三日まで)であって、父母の下で笑ったり泣いたりして、また少女たちの家を訪ねて久しぶり語ったり、炉を囲んで村の悲哀を聴いたり、一家零落の跡を弔うて心を痛めたり、屠蘇一杯の酔に乗じて村長たちと政治を論じたり、太宰府天神宮を見物して歴史を考えたり、噴火口

を見てこの天然の變転の恐るべき事実を見たり、寂莫の高原や草原の人なき処を兄弟で並んで歩きながら語ったことや木賃宿に一泊したなど、二十日間の旅行は一篇の詩のようである。と旅行感を述べてある。

次に熊本旅行の途中、五日の夜宿で書いた日記を写して、自分の感想を報せてある。

自分が今警句として、希望、愛情、義務、確信、自立と考えているがまだシンセリテイが足りない。と反省している。

二日に麻郷村の吉見家を訪問した時、そのあや、春の二人の娘を連れて平生町の写真館に行つて写真を撮つた。この少女の愛らしく無邪気なのを見て、この少女達がいづまでも少女で、自分はいづまでも青年でいたいと思つた。楽しい罪のない日が過ぎねばならぬと思つと悲しくなる。

待つ者は中々来ないようですぐ来る。来たものは去つてしまつてもう永遠に帰らない。人生とは悲哀なものである。人間の前途に永遠の希望がなかったら人生とは呪である。たゞ自分をして愛に生かしてくれ、愛は過去にある。現在にある。未来にある。

と、述べてある。

一月二十四日には大久保余所五郎にもこの九州旅行のことを報らせてある。原文のまゝ記してみよう。

去年十二月二十五日佐伯を發し歸省仕り七日間故山に滞在、本年本月三日の夜を以て再び航海をはじめ、門司に上陸して門司より音に名高き九州鉄道に乗り込み、四日薄暮此身は已に熊本城下の旅宿の二階に在り、途中宮崎八幡宮、博多、太宰府等を見物仕り候。熊本には五日間滞在、其の中二日は市街を去る三里許りの田舎なる杉上村てふ処に在り、則ち水谷真熊兄の家に在り、十日の朝熊本を發し行程三十六里其うち七里を馬車に其他は徒歩にて、九州横断十三日の薄暮月光已に冴え渡りたる頃漸く佐伯に帰り着き申候

二十日間の見聞感慨書き尽す可くも非らず

其の内尤も君に語りて妙なるは阿蘇山の登攀是なり、阿蘇山は立野てふ処より登れば噴火口迄で三里許り、噴火口より北西に走り下れば二里ばかり兎も角随分大なる山也。僕等兄弟此山に一日を暮し候。突兀としてる山と思へば大間違ひ也。山中枯草漠々たる平陵起伏小丘こゝかしこに頭をもたげて以て阿蘇山を組織せり、甚だ寂莫たる山なり、深山の幽暗なるきび悪ろさよりも古戦場の荒野の物すごさ也、殊に噴火口の近辺

は焼石突兀として起り、満月の光景実に入をして血の氷るを覚えしむるものあり、目下噴火口は一個也、されど旧噴火口は阿蘇山中処々に在り、兎も角吾等が生息する此の地球は必ず冷却しつゝある也 彼の月球の如くに、されど怪しむ勿れ、天帝無窮の時よりすれば地球の生命も野馬の生命も何ぞ長短を撰ばん。さて不思議千萬の宇宙かな、などと噴火口辺に立ち乍ら兄弟諸共語り申候。

と、ある。

二月五日に大久保余所五郎に手紙を出している。その中に

井伊直弼に対する徳富の評に付ては君も必ず何とか御説あらんと存ぜしが、果して然り。就ては君亦大に直弼の伝を草して世に問ふては如何、僕は此事を君にすゝむる也。

と、大久保に『井伊直弼伝』を書くことをすゝめている。大久保はその後間もなくこの伝を著して発行した。この本は当時有名著作となった。

次に、近頃歴史熱がさかんになった。歴史を人生の記録として読むと味がある。活眼を開いて活書を読む意気

で大いに読む考えだと云って、柵牟礼城趾の探険について次のように記してある。

昨日曜日、近村の一山に攀^よづ。これ四百年前の城跡なり。僕近來佐伯の歴史などはちくり居るが故に登りたる也。今は此山何の城らしき処もなければ猶ほ其の峻嶮なること昔と異ならず。僕等学校の生徒等と峻を凌^しびで登り、冬ながら流汗流るゝが如し。天暗慘、凍雲山を掠め、飛沫時に面を拂ふて来る。吾等枯木を燃て暖をとる。人生代々、昔も今の如く、今も昔と異ならず吾等何時か太古の民たらん。僕生徒諸子を大声に呼んで曰く諸君太古の蠻民よと、諸子皆笑ふ。

と、ある。

二月九日付けで出した中桐確太郎宛の手紙は、『ゲーテ』を送ってくれた礼と、その本代は送る金がないので月末まで待つてくれとの謝りと、『歴史研究法』を是非送ってくれるよう頼んである。この『歴史研究法』という本は中桐の著作である。

次に徳富は僕に近世史を読めとすゝめるが自分は近世史を持っていない。僕には読書熱はあるが読書力がないと、反省し、今、日本の国は動乱の機が熟しつゝある。

英雄が出て事を成すときである。しかし地方の青年にはこれに当るべき意気のさかんなものはいない。佐伯は殊にそうである。また東京の青年もそうである。と青年の不甲斐なさを慨いている。時機は、日本と清国との間に朝鮮問題がからまって危機が迫りつゝあつた。

二月の十六日と二十四日には田村三治に手紙を出している。

十六日の手紙には教会の状況を述べ、僕は近来益々神を頼り常に熱病を捧げて、希望を立て悲しみや憂えごとに打ち勝っている。この日本に神の真理が一日も早く伝わることを祈っている。しかし近頃利巧な信者らしいものがかえって真理の伝播をさまたげている。残念なことだ。と憂えている。

二十七日の手紙には色々近況を報せて、次に、
教会盛の由奉賀候 当地教会も亦た多少振ふ也 小生がたへず教会に出席するを面白からずと思ふ連中もあり、これが遠因となりて、近頃一衝突起り目下猶ほ奥歯に物のはさまりたく如くにて面白からず候 いざとなれば大に気焔を吐き飄然として此地を去る覚悟に

候らえど 軽々しく立たず、好みて人と争ふは徳と智の人の為さぬ処 されど又卑々屈々としても居られず 事々熱病を以てせば誤る事少からんと存居候と、記してある。例の勧告書事件以来のごたごたが尾を引いて、事件は大きくなりつゝあつたのである。

この頃、独歩兄弟は相談して、郷里柳井で印刷所を開設しようと考え、弟収二を帰省させてその計画の下話をさせていた。しかしうまく運ばない。新設には多くの金がかゝるので、借りようとしたが色々難色が多い。独歩は二十六日にその交渉相手である印刷所主河井大介に手紙で丁寧依頼してある。

小生未だ一面の識なき者に候ところ 父専八は多少の御親交被りし由承り候、吾が父は裁判所に職を失ひ甚だこまり居候処思ひ立つことありて印刷業を試みんとこの願を起され貴殿とも何とか談合ありしことを承り候

と、父の退職後の職を探がすが目的であつたのである。新らしく起す資金はないので貸して欲しいと丁寧頼んでゐる。(つづく)